
TWINS EMERALD

水島 滯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T W I N S E M E R A L D

【Nコード】

N 0 9 2 6 H

【作者名】

水島 澪

【あらすじ】

始まりは夏！しょっぱなから遅刻しそうな花梨は学校へ急ぐ。友達から転校生と聞かされ席に着くが・・・転校生は目を見張るほどの人物達だった！

s u m m e r x K a r r i n n ! (前 書 き)

2 作 目 作 り ま し た 。

読 ん で い た だ け た ら つ れ し い で す 。

summer x Karin!

舞台は丁度、七月に差し掛かったころである。

とある社宅。

「うーん、あと五分・・・」

ありきたりのパターンだが、鳴り続ける目覚まし時計のボタンを押し続ける少女がいた。

毎日、この調子なのである。

ダダダダダダ！！バアン！！！！

盛大に扉が開かれたかと思うと、茶髪のスラリとした青年がわずか入って来た。

「花梨

！！おーきーろー！！！！」

「むづづ……あと五時間……」

「はあ?!せめてあと五秒にしるよ!」

……なんとも言いがたい。

「起きないと……」

ニヤリと笑った青年は、ギシ、と音を立てるベッドに乗りあがり、そして……

「襲っちゃうぞ?」

耳に、息を吹きかけた。

「ひいやああああ!!」

「ほんと耳弱いなお前。」

「夏樹兄!!今何時?!」

「えー只今七時五十八分、花梨様の遅刻まで残り十七分でございます。」

「ぎゃあああー!!」

慌てふためくこの少女、佐伯花梨。花梨の弱点を使って起こしたのは彼女の兄、夏樹である。

「やばっ、あと十分になってしまった!!夏樹兄、行って来る!!」

「おー、いつてらー」

もしかもしかとパンを頬張る夏樹を尻目に、花梨は盟悠中学校へと家を飛び出した。

彼女達の両親は事故で他界。夏樹は17にして高校へ通いながら、特別に学校に認めてもらって仕事についている。

今日は仕事の日で、夏樹は学校を休むつもりだったため、花梨を起こすのを忘れていたのである。

「夏樹兄め・・・帰ったらぶん殴ってやる!ってそうじゃなくて!スピードアップ!!」

はびゅん

この少女・・・100メートルを13秒で走るのである。

「セ　　フ！」

「花梨！今日ね、転校生来るんだって！！」

「え、いきなり？」

「そお　　だ。佐伯、お前またギリギリだったろ。」

いきなり友達に転校生と言われ、先生に説教くらって花梨が席に着いたのは、五分後のことだった。

（ふーん、転校正か。どんな子だろう？）

周りは男だ女だ美人だ美形だなどと、勝手に騒いでいる。

（ま、どんな子でも、仲良くできればそれでいいや）

かなりポジティブである。

そんな子と言っていていられなくなるのはもう少し先だが……。

「おーし、転校生を紹介する。はいつてこい。」

扉が開いて、二人の生徒が入ってくると、一斉に女子は黄色い声を上げ、男子は固まった。

The emerald twins .

一人目は、170センチぐらいの長身で、逆立った髪が印象的な男。

二人目は、155センチぐらいで、腰まで流れた髪の毛が印象的な女。

そして、金髪、透き通るような白い肌、なにより……澄んだエメラルド色の瞳が共通していた。

「自己紹介してくれるかな？黒板に名前書いて……」

その名前がまた、かっこいいのである。

白峰
柊

白峰
楓

「え……し……しらみね……？ひいらぎ？かえで？」

とたんに辺りはざわつく。

「こら、静かに！じゃあ、自己紹介して貰おうかな。」

みんなが注目する。

先に口を開いたのは、男の方だった。

「白峰 柊だ。」

「妹の……楓。」

「何か、質問はないか。」

担任が言つと一斉に手が挙がる。

花梨は引いた……。

一人が指名されると、もっともな質問をした。

「外国人ですか？」

（うわ、どストレート。）

「知らん。」

（あなたもですか、白峰兄。……ってまで、知らんって！もーちよい言い方考えろ！！）

「……ハーフ？」

（先に言えよ白峰妹！！つーかなんで疑問系なんだよ？！そして兄、自覚しておけよ！！）

とまあ花梨が盛大につつこんだところで、チャイムが鳴った。

「白峰たちは帰国子女だ。色々こっちに来たばかりで分からないことが多いだろうから、皆おしえてやれよ。席は、空いているところに座ってくれ。」

(おいおいもしかして空いてる席って……)

「丁度佐伯の隣だな。教えてやってくれよ。」

(はあああああ？！なんでこんな変わりまくった人たちの相手をしなくちゃいけないんですかー?!)

「声にでてるぞ。ま、そういうことだ、よろしく頼んだぞ。」

「ええー！そりゃないでしょ先生　　！！って無視かい！！」

(あああ……まわりの皆さんの視線が痛い……)

もちろん、嫉妬の白い眼である。

しらつとちゃっかり座っている美青年・美少女を見やり、先が思いやられるな……と思った花梨であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0926h/>

TWINS EMERALD

2010年10月9日04時02分発行